

教 仁 名 聞

第2号
(発行日)
2010年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○ 共学会—毎月6日午後7時始
○ 真宗入門講座—毎月18日
午後6時半始
* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

為すべき行為とは

私たちは「この大事な人生で、私は本当のところ一体、何をすればいいのか」ということがいつも人生活の基本のところにある問題ではなからうか。

ただ実際の生活においては、いろいろなしなくてはならないことがつきつきとあつて、へそんな問題を考えるゆとりもない」と、いわれるか

も知れない。会社勤めや商売、子や孫の世話、掃除や洗濯、日々の食事のこしらえなどしなければならぬことが山ほどある、といわれる。

そうであるけれども、毎日忙しい忙しいといひながら、しかし本人はそれではたして満足し、これでよいと落ち着いているのであるうか。むしろ何かしららないが、「これでいいのだからか」「こんなことばかりしていいのだからか」という疑問を抱えているのではなからうか。

お金儲けをするのも、それ

が目的ではなくて生活するためにやむなくやっているのが実状で、しなくていいのならしたくないというのが普通である。だから金儲けの仕事は、この人生においてどうしてもしなくてはならないことなどとは思っていない。生活のために働いているのが実状ではなからうか。

聖書にも、神の掟おきてに背そむき天国から追放されたアダムとイブは、エデンの東この世で苦しい労働して糧かてを得るような生活をせざるを得なくなつた、と述べられている。

ではいわれる「食う」ことができて、その上で本当にしなくてはならないことは何なのか。それが実は分からないのである。分からないから、とにかく自分の心に満足がえられるような事をしたい、というところで、さまざまにことが行われている。

ドイツやフランスでは、労働するのは余暇を得るため

あると考える人が多いそうである。生活の糧を得るためにやむなく働くのであつて、終業時間がくるとさつさと仕事を終え余暇よかを楽しむ。残業などはいやがるそうである。衣食住が確保できる上は余暇を楽しむ。そのため働くのだという。現在の日本でもそういう傾向が強くなつてきている。

ところが余暇よかができて、一体何をすれば、人生全体が「これでよい」という意味や満足があたえられるのか」が分からない。分からないから、「とりあえず」ということで、いろいろな趣味や習い事やスポーツなどで時間をつぶしている。TV鑑賞、社交

ダンス、外国語講座、テニスやゲートボールなどさまざまなことをして、生き甲斐や満足を求めている。あるいはより高い価値を求め、社会を良くするためにボランティア活動や市民運動や難民救済などの社会活動に参加することもあろう。

実際、社会を良くしていくことは当然大事なことであつて、それに積極的に関わることとはだれにも求められている。ただその場合、世の中が良くなるとか住みやすくなるとはどういうことであらうか。それはまずは、一人一人に「飢えと寒さと病気がなくて、安全な環境」が一応確保されている状態ではなからうか。そういう条件がほぼ揃そろっているような状態になること、それ

《 念 佛 寺 報 恩 講 》
十二月二十二日 (水) 午後二時始
講師 能登教区・清琳寺住職 法岡龍 夫師
*なお、十二月二十二日は午前十時より勤行・法話 (念佛寺住職) があります。

が政治や経済や科学技術の目的であろう。社会を改革するとか改善するというのも、当面はこういう状態にしていくことであろう。

そういう点で、日本はこのような条件が他の国々に比較して、かなり良い状態の国であろう。飢えて死ぬ人や、外で寒さに震えている人はごく少数である。病気になるのはいつの時代もしかたがないが、病気を治療する施設がほぼ整っている。また身の安全に関しては、戦争や自然災害、食品の安全性や公害など、それらはなくならないが、しかしほぼ安全な国である。そして余暇も増えて、それを楽しむことも結構できるようになった。もちろん、こういう状態がいつまで続くのか、それは保証の限りではないが。

ただし、こういう社会環境に存在している「その私とは何か」「私は畢竟何のために生きているのか」「生きる社会環境は良くなった。にもかかわらず私は刻々死んでいかねばならない」「もし火葬場が私の終わりではないとしたら私は結局どこへいくの

か」「どんなに暮らしやすい社会でも私自身はどこまでも孤独である」というような、人生の根本のところから問われていくような問題があるのではないか。

そのような問題があるゆえ、私たちの心にはいつも「私は一体本当には何をしたらいいのか。何をすれば人生に尊い意味や満足があたえられるのであろうか」という課題がつきまとうのである。

このような人生の根本的な課題に対して、釈尊はどう仰せられているのであろうか。

浄土の經典には「汝、名号を執持すべし」と説いておられる。何を行うべきか、「名号を称えよ、これを聞けよ」と、この事一つを仏は勧めておられる。人生における本当の行い、すなわち「真実の行」、それを釈尊は端的に「南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏を聞け」とお勧め下さる。この一行をたもてとお勧めになっておられるのである。

なぜなら名号をたもつことは阿弥陀仏をいただくこととなるのである。阿弥陀仏と

あうことになるのである。阿弥陀仏とは智慧と慈悲とのちはかりなきはたらきである。

私たちに根本的に欠けており、それゆえにいかにも社会や環境が整っても、一番根っこに欠乏感や不安があつて充たされないのは、かぎりない智慧と慈悲とのちにであつていないからである。

人生の意味と方向が分からないのは仏の智慧がないからであり、孤独で空しいのは仏の慈悲に触れないからであり、死ぬのがイヤで死にゆく先が不安なのは仏のいのちにであつていないからである。

しかも阿弥陀仏のまこと、はいかなる時代の、いかなる状況にある人々にも、一人一人にすでにさしよせられている真実である。国が安定し豊かである人々だけに許されている恵みというようなものではなく、万人に公開されている恵みなのである。この阿弥陀仏の御名を行じ、それを聞く一行こそ、いつでもどこでもなすことのできる真実の行いである。

(了)

正信偈に学ぶ問答

(三十三)

攝取心光常照護

已能雖破無明闇

貪愛瞋憎之雲霧

常覆真實信心天

譬如日光覆雲霧

雲霧之下明無闇

心光、常に照護したまう)の

意味をお話し下さい」

D「この文について宗祖ご自身、

「攝取心光常照護というは、信心をえたる人をば無碍光仏の心光、つねにてらしまもりたまうゆえに、無明のやみはれ、生死のながきよ、すでにあかつきになりぬとしるべしとなり」

と註釈しておられます」

G「信心を得た人は阿弥陀仏の攝取のお心によって、常に照らされ護られるということですが、信心のない人には仏様はお照らしにならないのですか」

D「いいえ、前に(一切の群生は光照を蒙る)、といわれているようにすべての生きとし生けるものは阿弥陀仏の光明に照らされているといわれています」

G「ではなぜここでは、(信心をえたる人をば)照らしまもりたまう、と限定されているのですか」

G「攝取心光常照護(攝取の

*

D 「それは一切の人を弥陀の光明は照らして下さっているのですが、信心の無い人は光明の利益である摂取不捨の利益をいただいでいませんから、光明の中にも仏の心光の功德を自分の身に実感できません。だから〈常に照護したまう〉という仏の光の利益がその人には現実化しないのです」

G 「信心がなければ、その人本人には光明の功德が現実化しないので、〈照護〉は無きも同然なのです」

D 「ええそうなんです。太陽は皆さんと照らしていても、閉め切った部屋の中にとじこもっている、太陽の恩恵を感じないのと同じです」

G 「だったら閉めきった窓を少しでも開くことが大事ですね。そうすると外の光が部屋に入ってきて部屋が明るくなりますから」

D 「ええまったくその通りです。閉じられていた心の窓が開かれて仏の心光を迎え入れることが大事なのです」

G 「仏の心光の入っていない私たちの心は暗いのです」

D 「そう思います。凡夫の心は本質的に暗くうっとうしいですね。うっとうしいから、

娯楽や趣味などで気晴らしをしたり、心が空しいから名声を高めたり財産を殖やしたりして、自分の心を満足させようとするのですね」

G 「私たちがいろんなものを求めていくのは、暗くて空虚な心をなんとか自分で明るくし充たそうとするいとなみである、一面からはいえると思います」

D 「ええそう思います。そして心を一番暗くするのは、死と病と貧乏でしょう。これらから何とかして心を明るくしようともがいていてるところが心は一向に明るくならないのです。私たちが求めているこの世のさまざまな宝やよきものや美しきもの、いわゆる財物や健康や名声などは小さな光であって、それらは心の本質的な暗さを破る力はありません」

G 「では私たちの心の闇は何によって破られるのですか」

D 「それこそ阿弥陀仏の心光によってです」

G 「心の暗さを破る光が阿弥陀仏の心光なのです」

D 「ええそうです。ですから阿弥陀仏の光明を迎え入れることが重要なのです」

G 「阿弥陀仏の光明は具体的にどこに働いていますか」

D 「常に真実の言葉となって喚びかけておられます。光明が言葉となって私に喚びかけて下さる。それが私たちに働いての具体的な阿弥陀仏の働きです」

G 「どのように喚びかけておられるのですか」

D 「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と喚びかけておられます」

G 「では光明を迎え入れるということと南無阿弥陀仏とはどういう関係がありますか」

D 「南無阿弥陀仏の言葉を受け入れることが光を迎え入れることです。光を迎え入れることは閉じられていた私の心の扉が開くことです」

G 「南無阿弥陀仏の言葉を受け入れるとは」

D 「南無阿弥陀仏を信じることです」

G 「南無阿弥陀仏はどういう意味の言葉ですか」

D 「〈助からぬ汝を助ける〉という阿弥陀仏の大慈大悲の言葉です」

G 「この仰せを受け入れる時、光が入って下さるのです」

D 「ええそうです。非常に不

思議なことです。ありがたいことです。そして仏の光とは心の光であって、太陽や月のような物質の光ではありません」

G 「仏の光は心の光なのですか」

D 「そうです。心の光ですから私の心に入って、私の心を照らして下さり、私の心と離れなくなりたもうのです。心から心へという、心と心の関係です」

G 「私を照らして下さるとは」

D 「私の心の暗さ、すなわち煩惱を照らして下さるので、仏心に照らされるとき、私を苦しめている正体があらわとなってきます。私を苦しめ悩ませている正体が暴露されてくるのです」

G 「煩惱を知らせて下さることに、私自身を護って下さるのです」

D 「ええ、〈幽霊の正体見たり 枯尾花〉というように、私を苦しめる正体が知らされてきて、〈ああ自分の都合で苦しんでいた〉、〈自分の煩惱に振り回されていたんだ〉ということがだんだん知らされてくるのです」

G 「では護られるとは」

D 「入りたもう仏の心光が私の心と離れなくなり、それによって迷いの境界を離れていき、人生に満足が与えられてくるのです。それが護られているということの基本的な事柄だと思います」

G 「なぜですか」

D 「摂取不捨の大悲心は私に常に離れず、寄り添って下さいます。そして人生に満足感を与えて下さいます。そうすると人生全体への不満が消えていき、おのずと我欲が否定され、してはならないこと、次第にしなくなっていくので、悪道に落ちることからも護られるのではないのでしょうか」

信心夜話

《松並念仏語録に聞く》二十九

太字が松並松五郎師の言葉。

(以下の太字は松並さんが二十九才の一月十六日、比叡山の黒谷・青龍寺にある経堂で深夜、極寒の中でお念仏をしておられたときに、感得された経験を述べられた文章です)

世の方々には寒さにあえば「宗祖様の御流罪の御苦勞を偲ぶ」と申されますが、極度の寒さに会った時はとてもとてもそんな心は、私には出ませんでした。この遭い難き御法にあわせて頂いた事さえ、よろこばなんだ私でした。その時、「歡喜も約束でないぞや、懺悔も約束でないぞや、たとえ一声も南無阿弥陀仏と称する者かならず間違わさんは弥陀の誓いであるぞや」との御知らせを受けました。私は喜び心がないので、ざんげ感謝の心がないので、経堂へ参詣致しました。それを聞かせて頂いて、寒さも苦しさも総てを忘れて南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。

また苦しさが追って来た。その苦しさを乗り越えようと、やや楽にお念仏が続いた。百雷が一度に聞えたか

の様に感じたとき、

「それぞれ声が弥陀じゃぞや、弥陀が声と成つてお前を迎えに来た。あいに来た。連れに来た。弥陀直々の迎えでも物足らぬかや」

そのひびきを聞いて、天に躍つて喜ばん、地に伏して喜ばん、この度弥陀の御誓に遇えることを 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。

(弥陀の本願を信じる信心の経験が松並さんの体験の上から述べられている。こういう劇的な経験は、だれもが経験することはできないが、大なり小なりこの経験に内容的、内面的に同質の経験が信心の経験にはあると思う。)

松並さんは十八才の時、大谷派住職の森師のお説教の中で、宗祖の「弥陀の本願ともうすは、名号をとえんものを極楽へむかえんとちかわせたまいたるをふかく信じて、となうるがめでたきことにてそうろうなり」という言葉を聞いて、それ以後、「お念仏するようになられた。(お念仏申す者を助ける)」という誓いがあるのだから、お念仏しようと思ひ立てた。実に愚直といいついていいほどの素直さである。しかも、実践的に念仏を称える生活をされたのである。私たちはお念仏が大事ですと、口ずっぱくいわれてもなかなか念仏しない。実際、念仏してみると無味乾燥であり、手応えがないので、お念仏から離れてしまう。そして感動やら、感銘を求めていろいろな法話や説教を好んで聴きにいく。感動した

り感銘したりすると手応えがあるので仏法が身に付いたように思うが、実際はその場かぎりの感激であり、しばらくすると消えてしまう場合が殆どである。ところが、お念仏は無味乾燥のように思うが、称えているとまづ習慣として身に付く。そして称えるお念仏の声が自然に耳に聞こえている。これが知らず知らず、仏法の中に身を浸していることになつていたのである。

松並さんは念仏申す生活に入り、それを続けていったが、やがて問題にぶつかった。それは誰しもがぶつかる問題である。いわゆる称えても称えても、喜びの心もなく懺悔の心もなく、感謝の心もない。こんなこととていいのであるかと。そういう問題である。口が動くだけで、心はちつとも変わらず、心は何ともなく、どうにもなつていれないことになり悩まれた。これはお念仏においてのみならず仏法聴聞に心がけるとかならずぶつかる問題である。仏法聞き初めのうちは、感激やら感動やらがあつて、聞いていても手応えがあり、だいたい仏法が分かってきたようにさえ思うようになる。しかるに、真宗の教義は分かるが、以前のような感動はなくなり、(あれも聞いたこれも聞いた)で、今度はいくら聞いても、心に喜びも感謝も慚愧も起こらぬ、ちつともウンといわれない自分の心にぶつかつてくるのである。

松並さんは、念仏しても喜びがない。これではいかんとなつて、真冬に比叡山にのぼり、法然聖人が本願の念仏にであったといわれる黒谷の報恩蔵(経堂)にこもつて夜を通して念仏された。自分の心の問題をほつておけなかつたのである。そしてそんな中で知らされたのは、念仏往生の思召しである。喜び心も懺悔心も感謝の心もない者に、「歡喜も約束でないぞや、懺悔も約

束でないぞや、たとえ一声も南無阿弥陀仏と称する者かならず間違わさんは弥陀の誓いであるぞや」とのお心である。「ただ称えよ、称えるばかりで助ける」との大悲を改めて知らされたのである。法然聖人も、親鸞聖人もこの誓願で救われたのであるから、この思召しを松並師は当然知つておられたであろうが、自分の心がどうにもならなくなつたとき、改めて知らされたのである。こうして「称えるばかりでお助け、そのほかになにもいらぬぞ」との弥陀の大悲に我を忘れてただ称えるばかりとなつた。しかるにしばらくして、「それそれが弥陀じゃぞや、弥陀が声と成つてお前を迎えに来た。あいに来た。連れに来た。弥陀直々の迎えでも物足らぬかや」というお心が雷のように響いて、ついに阿弥陀仏の大悲にまるとあわれたのである。すでに感じていた念仏往生の大悲心が、さらに松並さんの心に徹したとき、称える念仏の声がそのまま、今ここに来たもう弥陀ご自身の声であつたと、感得されたのである。お念仏の声そのものが弥陀ご自身の現れ。弥陀ご自身が私の処に「汝を連れに来た」とあいに来て下さつてゐる。それがお念仏の声と知らされた。松並さんの歌に「呼びづめ 立ちづめ 招きづめ 弥陀はこがれて あいに来た そのお姿が南無阿弥陀仏」とあるが、まさにこの体験であつた。松並さんのこの経験は(その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん)という第十八願成就文通りの、名号を聞く一念が信心歡喜の一念であり、仏心に撰取される一念であつた)